成功は目的ではなくその過程にあります。
楽しみの半分は、そこに行き着くまでにあります。
――ギタ・ベリン

異分野・社会現場への入口
新大は、どきどきワンダーランド

総合大学としての新潟大学の魅力

異分野へのインターフェース。人生の糧を得る鍵を手に入れよう。

総合大学の魅力

別の世界に接するインターフェース：
農業の現場、専門の異なる仲間

農学部　農業生産科学科　4年
田中　篤史

私は、農学部に入学したとき、大学での授業は講義だけかと思っていた。ところが２年次になって、2泊3日の農場実習で、トラクターの運転や乳牛の世話などを初めて体験した。3年次には農林経済学分野の専門に進級したが、新潟県の川西町という山に囲まれた山間地で、泊まり込みながらの農村調査の実習があった。そのおり、農家の方々とじっくり経営の現状や悩みを聞くことができた。それはたいへん刺激的で貴重な体験だった。机上の学習に留まらず、ナマの農業に触れた感じで勉強ができたと思っている。また、勉強以外の面では、クラブ活動で他学部にたくさんの友人ができた。専門の異なる仲間との交流は、ときおり別の世界に接するようで楽しい。総合大学だからこそ経験できることかもしれない。

大学生活

人生の糧となり、財産を得る場が新潟大学

異分野の英知が結集する場、研究だけではなく自分を鍛える場

大学院自然科学研究科　博士前期課程　2年
長澤　良則

私の大学生活は充実していました、と言える大学生はどのくらいいるだろうか。大学は学問を修める場であり自分を磨く場である。特に総合大学は様々な分野の英知が結集するところであり、またいろいろな個性をもつ学生や教授が大勢いる。

私は、新潟大学に入るまでは「学問を究める場」という印象がとても強かった。農学部に入学・卒業してその後大学院に進学し、現在は、「中山間地直接支払い制度における農地利用の変化」というテーマで修士論文に取り組んでいる。この６年間の学生生活で、今まで感じていた大学に対する印象が変わった。この間、私はクラブ活動やボランティア活動にも積極的に参加し、他学部の学生との交流等を通じて、総合大学は勉強や研究ばかりではなく自分を鍛える場でもあるのだな、ということを強く実感している。

大学で得ているものは多く、私にとってこれからの人生の糧となり財産になるだろうと予感する。多くの学生がこの新潟大学で大いに充実した生活を送って欲しいと思う。

水の都で感じる真・善・美。青春の感性とチャレンジ精神で。

私が見た新潟大学

真・善・美、学問・道徳・芸術の理想を求めて

大学院現代社会文化研究科　2年
姜　先姫（韓国）

最初、留学先を日本に決める時は、日本文化体験をしてみるという、余りにもお粗末で単純なイメージしか持っていなかった。新潟大学に入り、本格的に研究をするようになってから如何に、私の頭の固い所を思い知らされて、そして叩かれて、叱られ続けて人格的に成長していくのを実感した。勿論その過程で辛い思いや、苦悩もあったし、時には自分だけが頑張っているような気になっていたこともあった。良い意味でも悪い意味でもこんなに自分と向き合う機会を与えてくれた新潟大学に感謝の気持ちでいっぱいと言ったらほめごろしかな。

大学教育を考えるとき、いつも頭に浮かんでくる理想的な言葉は真・善・美である。真とは、学問の理想であるし、善とは、道徳の理想である。そして美とは、芸術の理想である。これらの理想を求めて皆さんも水の都と呼ばれている新潟の新潟大学で学問の世界の新しい理論や真理を発見できたときの喜びを感じてみたらいかが。

放射線技師ときどきorどきどき大学院生

社会に出てからもキャンパスに戻れる「ふところ」の大きい環境がある

異分野の学び、青春の感性、どきどきワンダーランド

大学院現代社会文化研究科　2年
松田　陽介

医学部保健学科の前身である医療技術短期大学部を卒業し、ある私立医科大学に勤務し、事故や自殺、労働災害を含むあらゆる病者とお会いし、病者の発生母体である社会に何かあるのではないかと思い法学部で学ぶようになりました。

その後、新潟の病院に勤務し時間が経過するのですが、社会人入試により法学研究科の院生となり医療を社会科学の方向から考察するようになった。気がつけば今は現代社会文化研究科にお世話になっています。

一度社会に出て色々考えたくなったらまたキャンパスに戻れる、そんな環境が新潟大学には用意されていました。総合大学の新潟大学はふところが大きく学ぶ機会を授けてくれます。ありがたい事です。授業の準備が間に合わず、どきどき、久しぶりの外国語文献にどきどき、忘れかけていた青春の頃の感性にどきどき新潟大学は楽しいワンダーランドです。皆様どきどきな世界に一緒に参加しましょう。

国際化の進む新大で思うこと

三年で倍になった留学生の人数。日進月歩する国際化を見守りたい。

学習奨励金選抜制度の透明さ、公開さの問題改善にチャレンジして雄飛する場

大学院現代社会文化研究科　2年
王　強（中国）

本人　右側

三年前、私は中国の天津から留学に来ました。日本で自分の研究課題に一生懸命に取り組み、また将来中日友好のために自分の力を捧げたい、というのが私の大きな夢でした。今、新潟大学での三年間を振り返ってみると、感心したこともあれば、失望の意を禁じ得なかったこともあり、本当に感慨無量です。

新潟大学に留学生センターがあるのは、何よりも嬉しいことです。新潟大学の国際交流事業は大いに拡大され、三年前は200人程度だった留学生の人数が今や40ヶ国から400人以上という膨大な数字からも新潟大学の日進月歩する国際化がうかがえます。

私ががっかりしていることは、学習奨励金選抜制度に不備があることです。透明さを欠き、公開さが足りない点は、留学生達の間で大いに議論されていることです。国際文化という大きな流の中で、このような点は一日も早く改善されればと思っています。このような問題改善のいかんは国際化における新潟大学の成長に直接つながるものだとつくづく思います。

一人の留学生として、母校が国際化の大きな流れのなかで青空に大きく雄飛するよう願って止みません。